

思い出の動物たち (11)

～子ザル、しのぶちゃん～

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～名誉園長)



この11月、秋田大学で開催された「第21回日本子ども学会学術集会」で「人と動物 動物園といのちの教育」と題し基調講演する機会をいただいた。今の子どもたちは、いのちの感性を育む場でもある自然との関わりがどんどん削がれ、加えて、昨今はクマ問題もあり外での遊びも失われる始末。育ちの環境は貧弱になっている。こうした中、いのちある動物と触れ合える動物園の役割は重要度を増しているともいえる。

「日本子ども学会」は子どもの健全な成育環境について、学術研究の成果発表と意見交換をする場と伺ったが、全国から多くの研究者が参集していた。子どもの成育環境が激しく変化する時代、現代の子どもたちの成育を考える新しい人間科学としての「子ども学」を体系づけるにあたり、学会の役割は大きいと感じた。

前置きが長くなったが、今回は子ども学会の考えともどこか重なる、マントヒヒの育児放棄と人工哺育にまつわる悲しい思い出だ。それは50年近く前、大森山動物園の開園間もない頃の古い話だが、後に私が子育てについて様々思いを巡らし講演するきっかけになった出来事でもあった。

マントヒヒというサルはアフリカ大陸北東部のエチオピアなどに生息、一般的な森林性サルと違い草原や岩山で暮らし、サイズはニホンザルより少し大きい。ヒトと同じ真猿類に分類され、家族の結びつきも強く、大群で生きる。雄の肩から背が灰色の毛で覆われる姿がマントを

着ているように見えることからこの名がある。

話を本題に戻すが、ある時、子育て経験のある母ザルがなぜか出産後、育児放棄してしまった。赤ちゃんザルは飼育室床で「キィキィ」と泣いていた。私たちは助けるため人の手で育てることにした。当時の動物園ではサルの人工哺育は未経験だったが、やるしかなかった。それはいわば人の赤ちゃんを育てるようなものだった。雌の赤ちゃんザルに私は「しのぶ」と名付けた。女優の大竹しのぶさんがデビューした頃のことだった。

哺育にはトラやライオンの経験を活かしたが、サルはどこか違っていた。赤ちゃんザルの目がこちらに何かを言いたげに見えたからだ。哺育は朝早くから仕事終わりの夜まで続いた。忙しい飼育業務の合間をぬってミルクをあげながら、気づけばしのぶちゃんと対話をしていたのを覚えている。できるだけ一緒にいる時間を作ったつもりだったが、やはり業務の合間での片手間の哺育になってしまっていた。

はじめは弱々しかったしのぶちゃんだったが、日増しに体重も増え、しがみつく力も強まるのを感じた。哺乳後、抱いていたしのぶちゃんを保育器に戻そうとすると「放さないで」と悲鳴をあげるようになった。小さな手でギュッとしがみ付いてきたあの手の感触、今も思い出す。

哺乳を終え保育器に戻すと「エュー」と声を出し泣きながらシーツを手繰り寄せしがみつく様子は今も目に浮かぶ。「どうして独りにするの！抱いていてよ！」とのサインだったのだ。



仕事の合間の短い哺育の限界もあった。それを見ていた女性飼育員さんが縫いぐるみを持ってきてくれた。

哺育も2か月近くなると保育器が狭くなり、金網ケージに移すことになった。この頃、しのぶちゃんの態度に異変を感じる事が時々あった。出入口のドアが閉まりボタンと音をたてたりすると彼女はなぜか極度に怯えた態度で「ギャー」と声を上げたり、縮こまるなど精神的な不安定さを感じさせた。また子ザルらしい柵を登るなどの遊び、あるいは冒険的な動きがほとんど見られなかったのだ。ただ、しのぶちゃんは食欲旺盛ですくすくと成長していった。

その後、彼女の将来を思い、家族と暮らしてもらうことを考えた。しのぶちゃんはマントヒヒ、その世界で暮らさなければならないからだ。

3か月齢くらいになった頃、サル同士で生きる訓練をさせようと考え、動物園にいた他種の子ザルと遊ばせてみたのだ。子ザル同士、ケージ越しにお見合いをさせた。その後、しのぶちゃんと子ザルを同じケージに入れてみると予想もしなかった光景を見ることになった。

子ザルは子ザルらしく、しのぶちゃんに近づき遊ぼうとしてちょっかいを出した瞬間、彼女は「キィー、キィー」と悲鳴をあげケージの隅で「私に近づかないでー、触らないで！」と言わんばかりに縮こまり、悲壮な形相を見せたのであった。遊ぼうと手を出した子ザルの方も「えっ、なぜ？」とキョトンとしてケージの反対側で様子を見る始末だった。しばらくそんな状態が続いたが、しのぶちゃんの態度に変化は見られず、子ザル同士の遊びを終えざるを得なかった。彼女の心はどこか硬く不安のカタマリのような状態だった。子ザルと対等にじゃれ合う心の余裕が彼女にはなかった、いや未発達だったのであろう。

そんな出来事の後、しのぶちゃんは何事もなかったようにケージ内で一人遊びをしたり、時々外に出すと飼育員と遊んだりしながらそれなりに成長したのだった。

生後半年近くが経過し、サル舎の家族と暮らすための訓練が始められた。そのままにしていれば、ますますしのぶちゃんの世界は閉ざされてしまうからだ。初めはしのぶちゃんをケージに入れたままで家族とお見合いをさせた。母ザル、家族ザルは何度もケージ越しに「お前は誰だ！！」と言わんばかりにケージを揺さぶり圧力をかけた。しのぶちゃんは怖がりひれ伏していた。気の毒だとは思ったが、ここは耐え慣れてもらわなければならないと我々も心を鬼にした。何度かの威嚇でしのぶちゃんが攻撃的存在でないことを知った家族ザルたちは無視するようになった。

そんなお見合いを何日か行い、互いに折り合いがついたように思えた頃合いを見て、ケージを開放してみた。しのぶちゃんは恐る恐るケージから出たが、サル舎の隅っこでおとなしくしている日が続いた。若ザルが時々興味を持ってちょっかいを出したりもしたが、大きなトラブルに発展せず一安心であった。

そんな毎日の中、反応の乏しいしのぶちゃんに対し、家族ザルたちはイラつき時々乱暴することもあった。ひどい時にはしのぶちゃんは手や顔に咬み傷、ひっかき傷を負い、その都度数日間の治療を余儀なくされた。こうしたトラブルを受けながらしのぶちゃんは耐えていたが、やはり家族との交流はできず、小さなダメージが蓄積するようになり、独りぼっちのしのぶちゃんは残念ながら3歳まで生きることができなかった。

しのぶちゃんのサル生を全うさせることができなかった悲しい物語には、母ザルの育児放棄、人の手での哺育などの複雑な要素が絡んでいた。子育ての難しさを痛感させられた。子ザルが愛情を欲していた時、受けるべきタイミングで、それを必要なだけたっぷりあげることができなかったことが大きな要因の一つだったに違いない。子ザルにはミルクという体の栄養とともに、母ザルに抱かれての安心という心の栄養も必要だったのだ。人の子育てにも通じる。